



筑紫女学園大学リポジット

Study of Japan Described in Contemporary Chinese Literature in Singapore

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石, 其琳, SEKI, Kilin メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/476

シンガポール現代華文文学の日本描写についての一考察

石 其 琳

Study of Japan Described in Contemporary Chinese Literature in Singapore

Kirin SEKI

前 言

本論は前回発表した「シンガポール当代華文文学への視角」(注1)論文の継続的研究であり、研究対象も前回同様、『シンガポール当代華文文学作品集』(上・下)(注2)である。この作品集をとり上げる意義については、すでに前回の論文で論じたため、ここでは省略する。作品集については、作者が必ずシンガポール在住であることと、シンガポール社会のことを題材にとりあげた内容の作品だけが選録する条件になっている。よって、この文学作品集は華文文学であるけれども、そこで生活する人々の日常が描写の対象になっているため、シンガポール社会の実態と問題点を作品通して、観察することができる。

シンガポールにおける「華文文学」の位置づけを考えると、もはやシンガポール一地域だけのものではなく、「世界華文文学」とのつながりから、「世界華文文学」の一環として、その地位を保っているといえる。シンガポールには、人口の7割を占める華人にとっての「華語」も第二言語という感覚ではなく、広大な中華文化がアイデンティティを持つ重要な生活言語である。作者が「華文」を使って作品を創作する際、この歴史と文化的視点が、ある意味では、構想に欠かせない重要な要素になっている。さらに「華文」の使用によって、作者たちは、シンガポール社会や国家の現実について、さまざまな思いを「華文文学」の領域を通じて、国際的な営みより、世界へと発信されるものである。

今次の作品集の中から、とくに日本をテーマにした4つの作品「井戸の物語」、「私は楊貴妃を日本人に贈った」、「嬰粟・花」、「張お爺さんの小便物語」をとりあげる。作品を通して、作者たちの思いを探り、歴史や社会の視点から、その創作意識を明らかにし、シンガポール社会における、日本に対する印象と関係を考える。以下は作品を略訳しながら、その日本に関する描写の特徴性を考察する。

I これらの作品をとりあげる理由と背景について

前回の論文では、上述作品集の文献的重要性については、すでに述べている。この作品集の作品は1980年代から現代まで、この三十年の優秀作品に限定して選録されたものである。そして序文に、全作品集69人の作者たちの年齢層の平均生年は「1952」であり、世代的に老、中、青の三世代を含

む構成になっているという。今次とりあげる4作品の作者は、50年代が三人、60年代が一人で、全てが戦後生まれである。この4作品は、シンガポールが1942～45年における日本占領時代の歴史に関わる内容であり、この侵略の歴史事実がもたらした傷跡と影響がそれぞれの形態で描写されている。シンガポールで最も住民の多くしめる華人社会で展開される「華文文学」において、日本と関わる創作テーマの感情表現、そしてその歴史意識の伝承について、注目をはらうべきである。

シンガポールという国家の原型は、イギリスであり、社会の原型は中国であることがよく知られている。よって、シンガポールは、世界各国と関係を持ちつつ、独立国家を形成しているのであるが、国民がイギリスと中国に特別な感情を持っていることもまた事実である。戦後シンガポールは金融経済先進国家になり、そして日本も戦前の軍国主義大国から、経済大国へ変身するのである。シンガポール政府は、1980年に「日本に学べ」キャンペーンを始め、一般に若い世代は、親日的で、日本の生活と文化にも関心が高い。しかし、侵略された悲惨な歴史経験は、簡単に風化されるものではない。このシンガポール現代社会を背景に、日本占領時代に関わる傷跡を描く作品について、作者たちがどのように表現し、いかなる視点で次世代に伝承する責任意識を担ったかは興味をそそるものである。

さて、作品集に日本と関係する作品が選録された点は意味があり、重要視されねばならない。だがその内容に触れる前に、創作意図にも関わる日本占領時期の歴史背景を知るために、まず一つの重要な文献資料に触れておきたい。それは『日本軍占領下のシンガポール』（注3）であり、副題として「華人虐殺事件の証明」と表記されている。その「訳者あとがき」によれば、この著書は『新馬華人抗日資料1937-1945 (Malayan Chinese Resistance to Japan 1937-1945 Selected Source Materials)』（文史出版 シンガポール1984）の部分訳である。原著の編集、出版について、訳者の田中宏氏は「原出版人、故莊惠泉上校、原主編、故許雲樵教授。編修、蔡史君」となっているが、そこには原著誕生の歴史が込められている。莊氏は厦門出身であり、若年時南洋へ渡り、日本軍によるシンガポール占領直前に脱出し、抗日義勇軍136部隊の副隊長になっている。戦後の1946年6月に発足したシンガポール華僑集体鳴冤委員会においては、中心的役割を果たしている。その後日本占領時代に関する資料を収集し、編集を南洋大学の許教授に依頼したのである。だがその後、莊、許氏とも亡くなってしまい、136部隊の隊員たちから若手の歴史研究者である、日本留学生であった蔡氏を動員した結果、ようやく出版できたと説明している。

さらに田中氏は同文章において、この本を翻訳する理由背景を語っている。それは1965年、自分と同世代のマラヤ留学生と触れ合う機会をもったことであり、その留学生から、かつての日本が東南アジアを侵略した時、シンガポールで起った大虐殺事件に関する新聞記事を見せられて驚いたというものである。恥ずかしいことで、自分には日本軍がシンガポールを占領したことさえ学んだ記憶が残っていなかったという。そして1963年にはシンガポール政府が主催して「全国戦没者追悼式」が行われ、戦時中シンガポールで発生した日本軍による虐殺事件の遺骨収集活動のなかでは、対日賠償要求の大集会がシンガポール市庁前で開かれたのである。それは1963年8月25日だった。したがって戦没者叙勳の名簿を新聞で見た留学生たちは、自分の親の世代の犠牲者の名前と「二重写し」となっている。また留学生たちから、小学生頃、隣の子供が廊下でタバコ売りしているのをみて、両親からその子の父親が日本軍の「検証」に遭い、行ったきりで帰ってこないため、母親が他人の洗濯をして生計を立て、貧困ゆえに学校へ通えないなどの検証事件に関する実例を聞かされたとい

う。その後、田中氏はこの事件に関する日本語の資料を懸命に探し収集したという。よって、この事件について、彼は、同文章において、日本帝国のアジア侵略が不可避的にもたらした事件であり、現場における偶発事件などでは決してないことを認識している。「敵性華僑」というが、日本軍の東南アジア侵略は、少なくとも満州事変以降の中国全面侵略の延長線上に位置しており、彼らが「母なる中国」を蹂躪した日本軍を眼前にして、「敵性」たるは至極当然だったはずである。しかもマレー作戦を担当した日本軍の第25軍（近衛師団、第5師団、第18師団）の中心部隊は、いずれも中国戦線を経ての南方作戦参加であったことを指摘している。

シンガポールにおいても、日本の国内同様に、戦前、戦中、戦後それぞれの世代が生存し、この歴史的な侵略事件に対し、実にそれぞれが当面した時代であり、生々しい記憶である。以下は4作品をみながら、戦後生まれ世代の作者たちが、日本占領の歴史記憶をいかなる形で表現し、なにを後世へ伝えたかったのかを考察しよう。

II 作品①「張お爺さんの小便物語」 子叶 作（1950～） 1992発表

張お爺さんは今年70歳すぎで、日本軍の南洋侵略を経験したのだ。その日、暇だった私たちは、日本軍のシンガポール占領の話を知りたくて、お爺さんをお願いしたのだ。張お爺さんはしばらく沈黙してからやっと話し始めた。

1941年私は20歳代で、埠頭で荷担ぎ人夫をしていた。この年日本軍は東南アジアへの快進撃でマレー半島を席卷した。当時10万の聯合軍でシンガポールを鎮守する白思華將軍は、絶対に敗れることはないといったのだが、しかし旧正月の日には日本軍が爆弾を投下し、人々の平和の美夢を崩壊させてしまったのだ・・・難民は逃げ回り、だがシンガポールは実に狭過ぎて、どこに逃げればいいのか？街の人は郷村へ、郷村の人は街へと蠅のように混乱な状況が続いたのだった。シンガポールが陥落され、抗日人士が数多く殺された。その後東亜共栄圏が建立されると、人民が平和に暮らせるようにするといった。私と陳おじさん一家は、戦火はもう屏息したと思い、故郷の牛車水へ逃げ、狭い家で身をあんじた。ある日、街頭で日本軍から労働者を募集する貼り紙がだされた。自分は若いし、仕事もないから、一緒に応募することにした。募集の場所に着いたら、すでに長い列ができていた。数人の日本軍は銃を持って広場に立っている、空き地に二十数台のトラックが駐車されていて、登録済みの人はみなトラックへ乗せられて、どこかへ消えてしまった。やっと陳おじさんの番に来た、「陳嘉庚は知ってるかい？」陳嘉庚は抗日首領なのだが、知っているとは言えないし、陳おじさんは急いで首を振ったが、日本兵はすぐに怒って彼を殴り罵った、「なに知らないだつて？子供でも知っているのに、嘘つくな、絶対に問題あるぞ」と。陳おじさんは何遍も釈明して、やっとのことでトラックに乗せてもらったのだった。つぎに私の番になったのだが、また同じ質問なので、前例に習って、「知ってる」と答えたところ、「おまえは抗日人士に違いないだろう」といわれた。私は必死に首を振り続けるが、日本兵は怒り私を殴って、トラックに乗れと命じた。熱くなったほっぺたをなでながら、幸運と思ったのだった。

トラックは満員なのだが、人びとはみな死体のように無表情だった。しばらくして、トラックは走り出した。私は立ったまま休息をしているうち、一時間くらい走ったのだが、急ブレーキがかけられ車は停車し、車内の全員が一斉に前へ投げ出されてしまった。足元をたちなおして、外をみれ

ば、車前に二人の日本兵がトラックから飛び降りて「まだ到着していないぞ、今停車してトイレするだけだ」と叫んだ。そしてズボンのまえを開いて、堂々と排尿しはじめた。彼らが思い切って排尿しているのを見て、自分もずいぶん長い時間トイレへ行ってなかったことを思いだしたのだ。すばやく身を動かし、トラックから飛び降りた。まあ、わしは5000年の文化をもった人間なのだし、厚顔のちび日本人とは違うのだ。排尿するにもみな目の集まる場所では、やはり避けたいと思い、すぐ近くの叢林に身を隠し、周囲に誰もいないことを確認してから、思いきり四方へまき散らしながら放尿したのだ。終わって、すっきりしたと思ったとたん、突然車のエンジンの音が聞こえ、急いでズボンを上へあげて、車を追いかけたが、追いつけなかったのだ。荒山野地で、大声で叫んでも無用だった。もうすぐ手に入る仕事もだめになって、あの「小便」のせいだと後悔するばかりだった。

トラックと同方向へいっても、どこへ行くのかもわからないし、結局戻ることにした。しかしトラックで来た道は長く、星空になっても着かないのだ。それに一日中なにも食べてないことを思い出した。ついに日本兵が守衛しているところまで帰ってきたのだが、夜は検査も厳しいので、叢林で一晩を野宿することにした。翌日起きた時、全身に気力がなく、おまけに熱っぽいし、自分の寝どころへたどり着いてからすぐに爆睡してしまった。朦朧とするなか、爆発的な人の声がうるさくざわついて、悲痛に絶えないほどの泣き声で、目が覚めたのだ。陳おばさんも死にそうに号泣し、陳おじさんの名前を叫んでいる。陳おじさんとトラックに乗った壮漢たち全員、樟宜尾まで送られてから、虐殺されてしまったとわかったのだ。

張お爺さんはここまで話して、一息嘆きながら、「運命だな！一度の放尿で、私の命が50年長く生かされたのだ。子子孫孫もお爺さんが生きた過去の歴史を記憶して、またお爺さんの放尿の故事も忘れないでほしいな」といった。

「張お爺さんの小便物語」の作者である子叶氏は1950年生まれで、年齢から考えると事実体験に近い描写であろう。さらに内容を検視すれば、かの有名な「検証大虐殺事件」に沿った内容の構想だと考えられる。実はこの事件について、同じ戦後世代においても、日本とシンガポールの人びとの印象が全く相違している。

上述文献で触れた蔡氏は、同書「日本軍占領下のシンガポール」の第1章に、この事件の概略を説明している。日本軍は1942年2月15日、シンガポール占領後三日目の2月18日に布告を貼りだし、18歳から50歳までのすべての華人男子住民は、日本軍の指定した5か所に集合するよう命じられたのだ。また街のあちこちに人を派遣し、口頭でもこの命令を繰り返し、華人を集合場所にかりたてたのだ。2月21日から日本軍は各集合場所で尋問を始め、釈放か拘留かの基準は各地まちまちであったが、拘留された住民の大部分はトラックに押し込まれ、海辺に連行されたり、船で海上に運ばれて、機関銃の掃射を浴びせられた。2月25日、華人肅清の第一段階の終了後、第二次第三次の検問が行われ、3月10日になってようやく一段落したのである。この事件は、フィリピンの大虐殺「バターン死の行進」及び「南京大虐殺」と並んで、日本軍の歴史に残る三大汚点であると指摘されている。日本軍の降伏後、この「大虐殺検証事件」が明るみに出されるとともに、1947年には法廷によって戦犯が裁かれたのである。日本国内ではこの事件について触れることは歓迎されないし、政府側の戦史にもわずかにしか言及されていない。一般教育として教科書でとりあげられたのは、かなり後

のことである。

戦後の日本は、朝日新聞1983年5月30日の報道によると、翌年の1984年度東京書籍の中学校社会歴史教科書がシンガポールの「大虐殺検証事件」をとりあげたのは、日本では初めてである。執筆者の丹羽邦男教授が書いた原文に「日本軍は、占領したシンガポールで、日本軍に抵抗するとみなした2万人も中国系住民の生命を奪った」のであるが、この保守的数字も文部省の不満により、最終的には「六千人以上」の数字に書き改めさせられたのである。(注4)

蔡氏は上述著作の冒頭の「日本のみんなさまへ」の文章に、シンガポールの歴史において1942年から1945年までの日本占領期は、シンガポール人にとってはよく知られている時期であるが、学術研究の領域では、まだ多くの空白と疑問が残されているという。よく知られているのは、(出版当時)50歳(現在70歳)以上の人びとは誰しもこの時代の経験者であり「生き証人」である。また日本での滞在経験をもつ、あるシンガポール人が驚かされたことの一つには、日本の青年たちがだれ一人として、日本軍がシンガポールで行った「検証」の史実を全く知らないことである。さらに一部の人はこの事件の存在さえ信じないということを指摘したのだ。

シンガポールの占領には、「中国人の粛清」が最も住民を苦しめた統治管理制度だったため、住民の間、とくに中国系住民にとって、実生活にしみ込んだ経験であり、決して簡単に払拭できる記憶ではない。のちに戦争の痕跡と社会に潜むさまざまな後遺症を檢視し、さらに人間社会の反省材料として、作者があえてこの題材を基に、創作を行ったのではないだろうか。作品の最後の部分に、張お爺さんは、一息嘆きながら、「運命だな！一度の放尿で、私の命は50年長く生かされたのだ。子子孫孫もお爺さんが生きた過去の歴史を記憶して、またお爺さん放尿の故事も忘れないでほしいな」といった描写は、作者が運命に翻弄されながらも、時代に忘れ去られる張お爺さんのことばと思いを借りて、シンガポール社会、とくに若い世代に対して、記憶に刻み、この事実と悲慘さを歴史的教訓になり得ると願ったであろう。そして作者は、この作品を自己の作品選集のタイトルにつけたことから、この作品に込めた深い創作意図が知れる。

Ⅲ 作品② 「井戸の話」 艾禺作 (1956年～) 2007年12月発表

この時代に井戸なんかあるもんですか？しかし彼はどうしても一つの井戸を探したいと聞かないのだ。ツアーでは彼らが一番年をとっているのだが、吉田さんと妻の年齢を足せば、他の7人の年齢の合計総数にあるほどだ。若者に興味のあるスポットは、彼らは興味を示さないし、いつも静かに隅の方に座って、どこでも見かける年寄りの姿のように、若い観光客が騒いでいるのを見つめるだけか、または居眠りをしているのである。だがセントサに着いて、セラソ砲台の「投降記念庁」へ来てからは、吉田さんは突然興奮しはじめたのだ。

日本統治時代の時間がここで重現され、当時の歴史を伝えたいのだが、見学者には、遠い時代のあの戦争の話であり、戦争の記憶も知識もない若い観光客には、蠟人形で事実を再現した展示物に対して関心を示さず、すぐに飽きて外へ出ていた。ただ二人の老人が残って、一つ一つ展示された光景を噛みしめたいように、牛歩しながら見ているのだ。

砲台の場所からでて、妻から老人に「本当に当時の情況なの？」「本当にそうだったの？」と問い詰められたのだが、老人は沈黙したままであり、急に表情が暗くなってきた。

「え？井戸を探すのですって？どこにあるの？見つかるの？」4泊5日のツアー最後の夜、私は吉田夫人から要望を受けたのだ。「あなたがその井戸をみつけるまで、私たちは残ってもいいですから」。「そうか、しかし・・・」。「謝礼はいくらでも払います。あの井戸がみつければ、彼の思いがけない、安心して帰れます」夫人は札束を私に渡し、その重さに私は頷いてしまった。私は探し回ったが、博物館の解説員の友人を通じて、やっと40年前の樟宜八條石の山奥にある一つの井戸を見つけだしたのだ。

5日後、興奮して付近にはすでに多くの住居が建設されたある通りに、吉田夫婦伴って、一軒の洋風の家の中のコンクリートの地面を指して「あなたがたが探している井戸はここにあります」といった。吉田夫婦はそれをみて、吃驚した。

「聞くところによると、この井戸は第2次世界大戦時に、日本・・・いや・・・誰かに爆破されたため、その後埋め戻してしまっただけです」。証明するため、私は聞いた資料内容をそのまま復誦した。

「日本人、そう、日本人がこの井戸を爆破したのだろうか？」吉田さんは突然激動しはじめ、全身が震えている。私は故意に「日本人」というのを避けたのに、彼が挑発するので、うなずくしかなかった。

「そうだ、これだ、当時・・・爆破したのは私なんだ！」

私は口をあけて呆然として老人を眺めた。斜陽に照らされた老人の顔は、半分が暗影になってしまい、さきほどの慈悲に満ちた表情には戻らなかった。

吉田夫婦を空港へ送った。「ありがとうございました。今回帰れば、主人は永遠に安心できるでしょう」。吉田夫人はシルクで包まれた四方の箱を持って、私になんども頭を下げた。吉田さんは、あの井戸の祭拝後、その日ホテルに戻ってからは二度と目覚めることはなかったのだ。医者からは、老齢で、疲れたうえ心臓病が突発したと診断された。いま思えば、井戸のそばにいた吉田さんは、激動して泣き崩れ、頭を地面に打ちつけて止まなかった。まるでそのコンクリート面を突き破りたいようだった。一か所の見えない井戸が、まさかこのように彼を激動させるなんて。傍らの夫人は彼の行動に止めようとせず、日が沈むまで、ただ黙って見守るだけだった。

好奇心にかられて、私はその解説員に井戸について、詳細な話を聞かせてもらった。

40年代、シンガポールが占領されたある日、二人の日本兵がこの井戸を通りかかった。そこではちょうど2歳の子供を連れた村婦が洗濯をしていた。二人は急な性欲にかられて、彼女をその家に強引したのだが、村婦があまりにも強く反抗したため、二人は激怒して彼女を殺してしまったのだ。そばにいる子供は血まみれの母親の死体へはいよって泣き止まないで、兵士たちはついにその母子二人を井戸に投げ込んでしまった。それでも子供のなき声がまだやまらずに聞こえてくるため、いっそうのことその井戸を爆破してしまったのだ。

それは午後の出来事であり、いまま変わらずに斜陽が「井戸」ではなくなった井戸を照らしている・・・井戸はもうないのだが、中の子供のなき声はまだ止んではいけないのである。でなければ、吉田さん呼び戻せない・・・。

戦後半世紀以上も経て、日本の社会一般の人たち、特に戦後以降の生まれの世代であれば、日本の侵略戦争の事実に対し、実感がなく、他人ごとのように、ただだれかの昔ばなしとして風化され

つつある。しかし、実際に当時の戦場で悲惨な経験をした普通の兵隊たちにとって、年をとるとともに、個々が自己の人生を振り返ってみれば、この戦争経験は深い心の傷であり、いとも簡単に忘却することはできないであろう。そのうえ、無事に生き残れた自分の戦後の人生をふりかえったとき、自分が遠い昔に犯した罪意識は、常に付き纏うトラウマのように重くのしかかって、はなれないのであろう。以下は、この心境を反映する資料を触れてみる。

1987年朝日新聞朝刊に「テーマ談話室・戦争」の連載がはじまり、かつて戦争に巻き込まれた国民自ら寄せられた声が登載され、その後『戦争』（上巻・下巻）として出版されている。評論家の入江徳郎氏はその冒頭の文章「後世に残す庶民のこえ」に、「ここには、かつての戦争に巻き込まれた国民の様々な声がある。ある人は、召集されて戦場に赴いたまま還らぬ肉親を嘆き、辛うじて生還した人は、悲惨さを極めた戦場の実態を語る。部下を見殺しにして、自分だけの安全を図った上官への怒りを込めた投書もあれば、責任を守り、部下の兵士をかばった将校の話も出てくる。・・・中国で民家を焼き払い、確かな証拠もないのにスパイとして住民を殺した。命令とはいえ、罪深いことをしたものだ。我々は中国に甚大な被害を与えた加害者だったと永年の悔恨を告白しているのもあれば、飢餓の極、人肉さえ食いかねぬ地獄図絵、狂気の世界を想起して、やはり伝えておかねばと書いた短信もある。」と書いている。

作品「井戸の話」の主人公吉田老人の心境の描写は、決して虚構されたものではない。今でも毎年8月になれば、終戦という特別演目で、TV、新聞などの報道が多数なされている。戦時の経験者が、戦争経験を公開な場で自ら出て語る場面を多くみられるのであるが、生命にかかわる重い話も多くあり、本人も話す途中で下向きに涙しながら、「もう言いたくない」と重い口調で嘆く光景も目に映ることがある。人間だれしも良心があれば、兵士にとって過去の自己の犯した罪悪的行為が心の深い傷になり、死ぬまで癒されることはなく、さいなまれるのである。作品「井戸の話」が描写したように、死ぬ前にシンガポールに足を運ぶ、加害者としての贖罪的行為によって、はじめて救われる元日本兵の気持ちを作者が鋭くとらえている。

米国の社会学者エズラ・ボーゲル氏が「日本人はドイツ人に比べて、戦争加害者としての意識が決定的に欠けている」（注5）と指摘したように、これは日本人にとって、大きいな悲劇だといわねばならない。作者は、一人の老人の惨めな心から、幻でない真実をさらし出し、侵略戦争の重責を多面的諫めたのである。

次に作品に描かれた吉田夫人に対する記述に注目したい。老人の罪深い心の痛みは、彼らだけではなく、共に生きる家族にもその痛みは伝わり、日々困惑すると同時に、ともに憂鬱へ落ち込むに違いない。ここでは上述同書下巻第9章にある読者の文章「戦争の話をしない父」に触れてみたい。作品「井戸の話」の描写に関連するから、その文章の一部を引用する。

「この欄を読むたびになぜI上等兵とかB軍医などと書くのが不思議でした。そんなにいやな思いをした相手ならば、戦後40年以上たったことだし実名で出せばよいではないかと。でも、私の父も満州へ行っていたことを思いだし、あの優しかった父が実名で誰かに非難されたらと思うと先ほどの気持ちは消えました。五十代で病に倒れた父は、生前戦争の話は何ひとつしませんでした。いま、この欄を読みにつれ、話せなかったことがたくさんあったのだらうと思います。・・・三人の子の親となった私は、今なら少しは父と戦争について話せたかもしれません。父から聞けなかった分、私はこの欄を通じて、私の子供たちに伝えようとファイルしています。（横浜市 内田恵美

子 37歳（当時） 自営業」

語りたくない自己の戦争経験をもつ元日本兵はどれだけいるのであろうか？こうして文字にあらわされるのはごく一部であろう。井戸の前で、吉田老人が頭を地面のコンクリートに叩きつけるように号泣するのを見ながら、全く動揺するような気配もなく、止めようとしないうの心境についての描写も深い。日々一緒に生活する妻こそ、老人の傷心と悔いの最大の理解者であろう。

Ⅲ 作品③「嬰粟・花」 丁云 作 (1952～) 2006年10月発表

ボビはチェンマイ行く途中で純子とであった。ボビはほかの旅客と違い、バンコクから飛行機、汽車あるいはバスに乗らずに、125CCのトヨタバイクをレンタルして、苦勞しながらの旅を続けている。彼は別に貧乏しているわけではないのだが、どうしてこんなことをするのか？自分でもわからない。おそらく中年をすぎてから体力も落ちてきたし、またひねくれた性格にも関係あるかもしれない。200キロを走り飛ばしたら、もう腰が痛くなった。刺激を求めての目的なしの「放浪の旅」では、なぜか「嬰粟花」をみてみたいと思ったのだ。偶然にも、彼はまだ19歳で一人旅をする変わった純子との出会いがあった。

あの日、驚愕しびくびくしたような顔で、山溪からはいあがってきた純子は、通り過ぎの彼のバイクを止めて、英語で助けを求めてきたのだが、このとき「このバカ女」と一瞬思ったが、泥まみれの彼女をみて、たすけることにしたのだった。二人の間は英語、華語？彼女はダメだし、日本語？彼はダメ。福建語、広東語、マレー語、タイ語全部だめだった、結局彼女は漢字がわかるので、漢字を書くことで何とか意思疎通ができたのだ。純子もやはり泥棒に遭い、バス運転さんにも騙され、着るものも、航空券、旅費すべてなくなって、幸いにパスポートは身に着けたため、盗まれずに済んだ。この全く関係ない二人、国籍、年齢、性格も全く違う二人、そして中国人と日本人の間に「歴史的旧怨念」もある？という二人は、一か八かで異色の旅の友になった。

「チェンマイに何しに行くの？」「嬰粟花をみたいんだ・・・」「嬰粟花をみるの？私も」そして「なぜ？」とかれ。「とてもきれいと聞いたから・・・」「毒もある、毒品にもできるそうだと話した。こうして彼ら二人には、嬰粟花探しの旅が始まった。彼は過失により仕事が続けられなくなったし、妻とも離婚協議中であり、親友もバリ島の爆破事件で死んでしまい、愛犬も死んだばかりであった。この人生災厄な時分に、日本人の若い純子が彼に何らかの生きる意欲をもたらしてくれた。旅館で彼は唯一知っている日本の歌「昴」をうたったが、それを聞いて純子は喜ぶのだったが、またすぐに表情が暗くなった。筆談で「お父さんを思い出した、彼は希望の昴の星を眺めたのだろうか？」と純子。「お父さん？」「本当はお父さんを恨んでいる・・・性格が悪くてヒステリックで、酒好きでいつも母を殴り、物を投げたり、やりたい放題。私が10歳のころ、母は白血病になっても、病状を隠しつつ、治療を拒んで死んでしまった。葬式の時、父親は涙をながしながら、手に土を掴んでお墓の穴に撒き投げた。私は信じられなかった、同じ手で母を殴ったのだから。それから私は父を離れて、北海道の祖父母のところへ行った。のちに祖母から父親の性格が悪いのは、戦争の陰影と関係あるかもしれないといった。」「戦争の陰影？お父さん戦争行ったの？」「もちろん行ってはいないよ。だけど祖父は戦争に行ったことがあるの。信じる？戦争の心理的な創傷は大変恐ろしいそうだ！祖父は中国の東北で人を殺したことがあるし、人肉も食べた。しかし彼はずっとこの

秘密の陰影を隠していた、祖母にも話さなかった。ある日彼がアメリカのプリッツ新聞賞の記者にこの秘密を漏らした。私たちはあの報導を見て、あの慈愛な祖父がまさか殺人魔だった・・とは信じられなかった。特に祖母は二日間も物がのどに通れなかった。あなた知ってる？戦争の陰影は遺伝するそうだよ。」「へ——、遺伝するって？」「そうでないと父親はなぜあんなに孤僻な性格になって、暴力振るのだろう？」「そうなのかな・・・」

彼らはガイドについて、傜族の村に入り、山頂で彼らは念願の嬰粟花を見たのだった。胭紅の花びら、嬰粟は削ると汁が出る、毒があってアヘンが作れるし、煉ってヘロインになるのだ。

旅館で泊まって、海鮮料理を彼女にご馳走したのだが、純子は食事中に顔が真っ青になって、トイレで数回嘔吐した。「どうした？海鮮にアレルギーなの？」と聞いたが、彼女は頭を振って、旅館へ戻って休みたい、とテーブル上にあるナフキンに書いてみせた。夜中にはまだ息苦しく呼吸しながら、トイレに行こうと、「医者に行かなくていいの？」と彼女に聞いた、彼女は日本語で何かしゃべったが、意味不明だった。そして純子は彼が動けないほどきつく抱きついてきた。自分は彼女の父親と思われただろうか？彼女は暗い幼小頃から、父親の懷で寝たことはないであろう？と考えた。しかし、彼は彼女に対して、何か違った感情を心から期待するようにも感じた。

翌日純子は、「昨日は失礼しました」と彼に謝った。「いいえ・・・」「ありがとう」チェンマイの空港で、彼女に東京行きの切符を買ってやり、自分の手持ちの米ドルも全部彼女に渡した。たどたどしい日本語で「さよなら」を彼女に言って、彼女は感激を抑えきれず、彼を抱擁して涙を流した。

都市に帰った彼は離婚協議書を受けとり、仕事のトラブルも解決して、新しい仕事をはじめた。2か月後、純子から手紙が来た。「私は末期がん患者だったのです。人生最後の旅をともにし、念願の嬰粟花も見ることができました。感謝しています。父親とも和解しました、なぜなら、そのお墓に土をまぶした手は、母を殴った手と同じ手だったのですから。いま父は神を信じて自分の罪に対して懺悔をしました。私も心の暗闇を払い、父親の負の戦争遺産の陰影から脱出できたのです。この手紙は病床で書いたのですが、あなたがこの手紙を読むとき、私も嬰粟花のように散っているでしょう・・・もう一度あなたにお礼をいいます、そして私を暗闇から脱けさせてくれたことに感謝します。・・・」彼は手紙を握りしめ、号泣した。純子の短い命のため、または自分の心の底にちょっと芽生えた小さな恋の夭折のために・・・

この悲恋物語は、戦時中の世代がひそかに持っている暗い影が作品全体に漂っている。父親の暴力的性格の背後に、祖父の祖母にも話さなかった悲惨で耐え難い戦争経験が潜んでいる。尊敬される祖父の人格は、記者に話したことによって、疑われ、家族まで陰險な暗闇の世界へ陥りされたのである。戦争の傷跡は、あらゆる面において、戦争体験者だけを苦しめるのではなく、戦後の世代、さらにその次の世代にも何らかの後遺症を「戦争の陰影」の遺伝として、残存され、癒されない心の傷になり、それぞれ世代の人生を苦しめている現実があると作者は訴えたのであろう。

Ⅳ 作品④ 「私は楊貴妃を日本人に贈った」 胡月宝作（1965～） 1994年10月発表

「Darling、今晚松坂一郎が来るから、明日の夕食を準備してくれ。松坂さんはChinese Food

を食べたいと、彼の秘書からのFAXでそう指示してきたから」。アンドルは秘書からFAXを受けてすぐに電話をかけたのだった。

「What? Chinese Food? 私はできないよ！」妻のリリアンが電話口でそう叫んだ。

「マリアに作らせればいいじゃない！」「彼女はフェリピン人よ、できるわけがないでしょう？あなたが彼を外の中華料理レストランへ連れていけば済むじゃない？」

「松坂さんが家を訪問するって、こだわっているんだよ。日本人はこういうのが好きなんだから、しようがないじゃないか。どうせ君のお母さんに頼んでみればいいだろ、とにかく明日夜7時にテーブルにChinese Foodを見せてくれ！今回の仕事は数百万のものなんだぞ」。アンドルは妻の返事を聞かずに電話を切って会議を続けた。そしてこの仕事は絶対にとりたいと彼は考えたのだった。

翌日松坂さんからリリアンに中華料理のお礼として、和服のプレゼントをうけたのだ。晚餐後、松坂はアンドルに伴われて彼の家を見て回った。

「とても古雅な雰囲気ですね！この掛け軸は《貴妃醉酒》の絵ではないですか」と、松坂はリビング左側の壁にかけている画軸を指して言った。

「あ…あ…、そうです、そうです、松坂さんはお目が高い、中国の絵を研究していらっしゃる、詳しいですね！」。アンドルはこの絵の古典衣裳に着飾っている女性を見つめて心から不安を感じた。この絵は、もの心がついたときからずっとここに付けてあるのだが、しかし彼は一度たりとも正視したことはなかった。「いえいえ、研究なんてとんでもない。楊貴妃は日本でも大変有名です。安史の乱後、われわれの祖先は彼女を助けて、日本に連れて行って、彼女のお墓は京都にあるのです。多くの人びとはよく墓参りに行くそうです」。アンドルは急に松坂が中国語で彼に話し始めたのには吃驚した。彼は仕方なしに対応している。「安史の乱」はなに？壁の絵の女は「楊貴妃」？小さいころから英語教育を受けてきたアンドルは、アメリカからMBAをとって戻ってきたばかりで、焦りながらも松坂の話聞いていた。「みて！この楊貴妃の酔う姿がとても美しく魅力的です。また詩句もかいてある、『雲想衣裳花想容』素晴らしいです！」。松坂は15分ほど絵の前に立って賞賛続けた。アンドルも例外に15分も付き合っていた。しかしなにがなんだかわからなかった。

リリアンはマリアに指示をしながら、この日本人は少し変わっていると思った。外見や英語の発音などからは西洋化されているように見えるし、ハーバート大卒とも聞いていた。この家の装飾のどこがいいのだろうか？Old Man（父親）のメンツのためでなければ、とっくに改築したのよ。しかし彼はこれらの花瓶とか、絵とか古臭い骨董品に興味深々であり、また華語が話せるなんて？

突然、松坂から「アンドルさんあなたの中国語の名前はなんですか？」、「中国語の名前？」、困ったアンドルは「われわれの祖先は峇峇（マレーと漢民族の混血）です、そしてクリスチャンなので中国語の名前はないのですよ」と急場しのぎって答えた。翌日アンドルは今回の仕事の激しい競争事態に頭を悩ませているのであった。楊貴妃の絵がふと頭に浮かんだ。そしてアンドルは契約を順調に成立出来た。これは彼にとって最初に受注した仕事になったのだった。

アンドルは松坂を空港に送り、そして1か月前に中国へ出張した社長の父親を迎えて戻ってきた。家路に彼は父親に今回の自分の成果を報告した。翌日の朝、「アンドル、壁にある絵は？」と父親から問い詰められた。「ああ、あの楊貴妃よね、僕は松坂に贈ったのです」。アンドルは自慢げにいった。「お父様、あのぼろい絵から、350万ドルの仕事をもたらしたのよ。損はないじゃないですか？」と、リリアンも横で口をはさんだ。父親は急に手に持った熱粥を強くテーブルに置き、眼玉

が飛び出さんばかりに血相を変えた。「お父さん、あれが骨董品だったのは分かります。いくらですか？私が買ってお金を返すから」とアンドルは父親のケチな態度に不満げにいった。老人は一か月もかけて考えた末、決断した——「富商は700万の書画と古玩を寄付した」と、アンドルは秘書から見せてもらった《聯合新聞》と翻訳を聞いて、すぐさま父親のオフィスのドアをノックした。

「私はもう二度と楊貴妃を日本人に贈るようなことはさせたくないのだ」。父親はアンドルの顔も見ずに、平静な口調で言った。

この作品は、英語教育重視のシンガポールエリートであり、「中華文化」の教養に欠ける息子の「愚行」とそれに対する父の憤慨を通して、世代間の対日感情の落差を描写し、問題提起をしている。作品の時代背景は、まさにシンガポールの社会発展が高揚するさなかであり、経済優先の意識が最も重要視される時期である。若い息子世代と父親世代が、「中華文化」のプライドを意味する「楊貴妃の絵」に対する愛着の違いから、親子世代の日本人への感情表現をうまく醸し出している。父親は昔と今の状況変化を認識した上、経済優先を前提に、反日的感情を抑え、結局自分のコレクションの名品を寄付することを決断したのは、自分のプライドに逆らうような過ちを、もう二度と息子の世代で重演させないためである。

作品の重要な表現について、シンガポール社会における日本の侵略行為に対する怨恨は、世代によって対照的であり、いまだに残存する現実を強調する作者の意図がうかがえる。しかし、その息子の感覚と思考は、決して特別なことではないという事実も無視できないのだと、シンガポール社会の現実に対し、作者が痛感する思いも込められている。

ここで侵略戦争の歴史に対する認識と感覚の世代間の相違について、まず加害者側としての日本社会の実態に触れてみる。1971年日本で北山修作詞の歌「戦争を知らない子供たち」がヒットしてから、もう40年ほどたったが、その歌中の「子供たち」は、息子なら今は「父」に、さらに「祖父」の世代になりつつある。終戦20年を記念に『週刊朝日』が『父の戦記』を募集し、のちに本として出版している(注6)。その最後の解説に、大西赤人氏は「この募集が父から子への戦争体験の継承・伝達を(象徴的に)目指して行われたのは明らかであったが、その後、この継承・伝達の必要性は年を追ってますます声高くと指摘されている。本書の再刊などもそんな指摘に応える一つの実現ではある」と説明を加えている。一方、師岡康子氏はその『ヘイト・スピーチとは何か』の本に「これまでの学校教育は現代史を軽視し、侵略と植民地支配の加害の歴史をほとんど教えてこなかった」と指摘する(注7)。そのツケが今日の若い世代における、あの侵略戦争に対する認識と受け入れ方を困惑させている。歴史知識の欠陥から、真実を直視できず、不安と無策へ落ち込み、侵略する事実を拒否し、逃避するのである。逆に被害国から批判されることに対し、いらだつが故に、ヘイト・スピーチ的に反応しかねない現象も多くみられる。この日本社会の現実、世界的視野から考えれば、今後も続けられる深刻な問題であろう。

だが、作品④が描写する内容から、被害者側のシンガポール社会において、別の意味の問題を示唆している。文献資料(注8)によれば、シンガポールにおいて、1984年に中学校は歴史が必修になり、教科書に日本占領期についての描写が記されており、その描く方はその後も変化は見られないである。そして小学校は、1999年から日本占領期の内容を記述始めるが、内容的には中学校のも

のと基本的に変わらない。2005年版の教科書に「世界とつながる：外国支配下のシンガポール」篇の第2章「日本占領下のシンガポール」では、日本軍の戦争捕虜の扱いが酷かったこと、皇民化教育、マスコミ統制、華僑、華人肅清（虐殺）について、シンガポールすべての民族にとって苦しみと満ちた時代だったと記している。これで日本占領歴史の知識として、若い世代にも伝承可能だと言える。しかし実際日本軍は占領中、華僑、華人とユーラシアン（欧亜混血）は敵とみなし、容赦なく弾圧する一方、マレー人は占領行政に携わる官吏として登用し、インド人もインド独立のための暫定政府とインド国民軍をシンガポールで組織して協力させている。このような事実背景から、「戦中」または戦争後遺症として、「戦後」世代の華人たちが最も重大な被害を受けたに相違ないであろうし、よって作品に父親世代が特別な対日嫌悪感情をもつのも無理はないのである。

1981年には、シンガポール生まれがシンガポール人の半数を超えて、シンガポールも移民国家から脱出しつつある。現地生まれの若者たちは、豊かな社会に慣れた生活をおくりながら、言語教育の英語重視により、欧米化がより速く進み、華人の子孫として生まれても、彼らはもう見知らぬ父祖の世代の怨念に関心が薄く、ほかに祖国を持たない真のシンガポリアン世代として生きるのである。作品中のエリート息子世代の思考が普遍化しつつある現実に対し、これから両国の関係に限って言えば、いずれ若い世代へ背負わせなければならないのである。よって作者は、この作品に込めた創作意識と使命感をもとに、現在のシンガポール華人社会に問題提起をするのである。

結 び

これまで4作品を見てきたが、作者たちの世代を検視すると、50年代生まれが半数を占めて、60年代生まれが一人である。そこで各作品の視点と構想にも少々の相違性が見られる。「井戸の話」は、旧日本兵たちは生きた証人として、加害者が行った残酷行為の罪意識に対する反省と悔悟を生々しく描き、「張お爺さんの小便物語」は、被害者としての戦地の実話を題材に、その悲惨さと無念さを語っている。「嬰粟・花」の作品は、戦争の後遺症がいかに甚だしく後の世代を苦しめたかについて問題提起し、「私は楊貴妃を日本人に贈った」の作品は、まさに現在のシンガポール華人社会が直面する現実の一側面を表現している。

華文文学だからこそ、日本をテーマにした戦争の記憶の描写が特別多いではないかとの考えもあるだろうが、しかし少なくとも華人の存在と、彼らがたどってきた歴史の道のりを抜きにして、シンガポール社会の歴史、文化は語れないし、無視できないのである。

今次取りあげた作品は、生活感あふれる日常を淡々と描いているが、実に過去の歴史に関わる重厚感に富むテーマの作品である。その背後には作者たちの激しく風潮に流されていく社会に対する思惑と真摯な期待が、随所に見受けられる。そして国際的視野と範疇をもつ華文文学として、過去の歴史に関わる異色で、かつ敬遠されるテーマの創作が、現在でもシンガポールの社会に重視され、優れた文学作品と評価されて、文献価値のある作品集に選録されることは、重要視せねばならない。

シンガポール社会に限って言えば、この歴史記憶は決して風化され、時間とともに流されたわけではないことを露呈し、対日感情の実態は、経済繁盛という大きなベールの下に、見え隠れしていることを意味するのである。作者たちは、全員戦後生まれの世代だが、あえて「父」または「祖父」、さらに「曾祖父」の戦記事実を基に、その辛い実体験を鋭くつかみ、あらゆる視点より、広く多世

代へもたらされた苦渋な影響を細かく描写し、後世に伝承する責任を、自ら抱いているのである。

現在は、日本またシンガポールにおいても同様に、戦争を知り、語れる人が年々少なくなっている。日本でも、これまで多くの戦争体験談に関する資料を出版されているが、戦没者に対する関心は、特に当時の歴史を知らない若い世代にとって、現実感に欠ける幻のドラマのように、感動も関心も薄くなっている。時の流れは阻止できないが、それでも痛みと記憶は、憎しみを増すためではなく、人間社会において、永遠の教訓として繋げていかなければならない。シンガポールの華文文学者たちは、伝承責任を果たすため、作品を描き、次世代へ語り続けている。作品の内容は語り部として示唆に富んでいるし、シンガポールの文学史においても、その歴史的価値は銘記されるであろう。

注釈

- 注1 「シンガポール当代華文文学への視角」筑紫女学園大学・筑紫女学園短期大学論叢 2014年8月
注2 「シンガポール当代文学作品集」(上)・(下) 陳榮照 希尼尔 他編 新加坡青年書局／香港明報月刊出版 2010
注3 「日本軍占領下のシンガポール」許雲樵 蔡史君編 田中宏 福永平和訳 青木書店 1995
注4 「日本軍占領下のシンガポール」のP.59～P.60を参照。
注5 第25回福岡「アジア文化賞大賞」を受賞した米国社会学者エズラ・ボーゲル米ハーバード大学名誉教授が米マサチューセッツ州ボストン市で西日本新聞のインタビューに応じた内容より。
注6 「父の戦記」週刊朝日編 朝日新聞社 1985 を参照。
注7 「ヘイト・スピーチとは何か」師岡康子著(岩波新書 2013) 第5章のP.203を参照。
注8 「シンガポールを知るための65章」P.37～P.38を参照。

主な参考資料

- 「戦争」上巻・下巻 朝日新聞テーマ談話室編 朝日ソノラマ 1987
「日本軍占領下のシンガポール」 許雲樵 蔡史君編 田中宏 福永平和訳 青木書店 1995
「侵略」中国における日本戦犯の告白 中国帰還者連絡会・新読書社編 1982
「父の戦記」 週刊朝日編 朝日新聞社 1985
「頭脳国家」シンガポール 田村慶子著 講談社 1997
「シンガポールの奇跡」 田中恭子著 中公新書 1984
「シンガポールを知るための65章」 田村慶子編著 2013
「物語 シンガポールの歴史」岩崎育夫 中公新書 2013

(セキ キリン：アジア文化学科 教授)